調査ノート

日田地域中世廃寺考

長　順一郎

一　はじめに
二　『豊西記』所載の寺院
三　『亀山鈔』『豊西説話』所載の寺院
四　村落領主の氏寺
五　地名に残る「寺」
六　何故に廃寺になったか
七　おわりに

一　はじめに

日田地域の方々に、中世寺院の名残りの仏像や、地名が散見出来る。その頃の寺院は有力者が、自分や一族の先祖を弔うため建立した寺院が多かった。その跡地を探しても狭少の土地に建立されたものが大部分で、一般の村の人々は関係なかったようである。

本論は、それらの記録、その跡地、仏像などを探し、寺の名の地名を尋ね、中世の残された片鱗を垣間見ようとするものである。

二　『豊西記』所載の寺院

日田は江戸幕府直轄地であったが、初期に二度大名領になった。最初は譜代藩石川主殿頭忠統(元和二年一六一六―寛永十年、一六三三)次で親藩松平守直矩(天和二年、一六八二―貞享三年、一六八六)である。この松平家の家臣早川氏儒家佐和氏により日田最初の史書が、貞享三年に出来た。それが『豊西記』である。

『豊西記』には、天正十七年日田郡検地の記録が所載されている。その中に寺社の所有、田畠の記事がある。

田畠　三十二町三反　永興寺

田畠　九町六反　永福田寺

共に、日田郡司職大蔵氏により建立、その氏寺であった。前者は長和三(一〇一四)年に［『日田郡史』に］後者は延久三(一〇七一)年［『豊西記』の註］建立のようで、両者共域内村にあり、前者は慈眼山の近くに、後者はどの地点にあったのかは不明である。永福寺は早く廃れ、永興寺も廃寺。後宝暦元(一七五一)年の頃大超寺の刺栗和尚再興して二寺を合わせ一寺とし、永興寺の名を残した。

［永興寺の仏像］

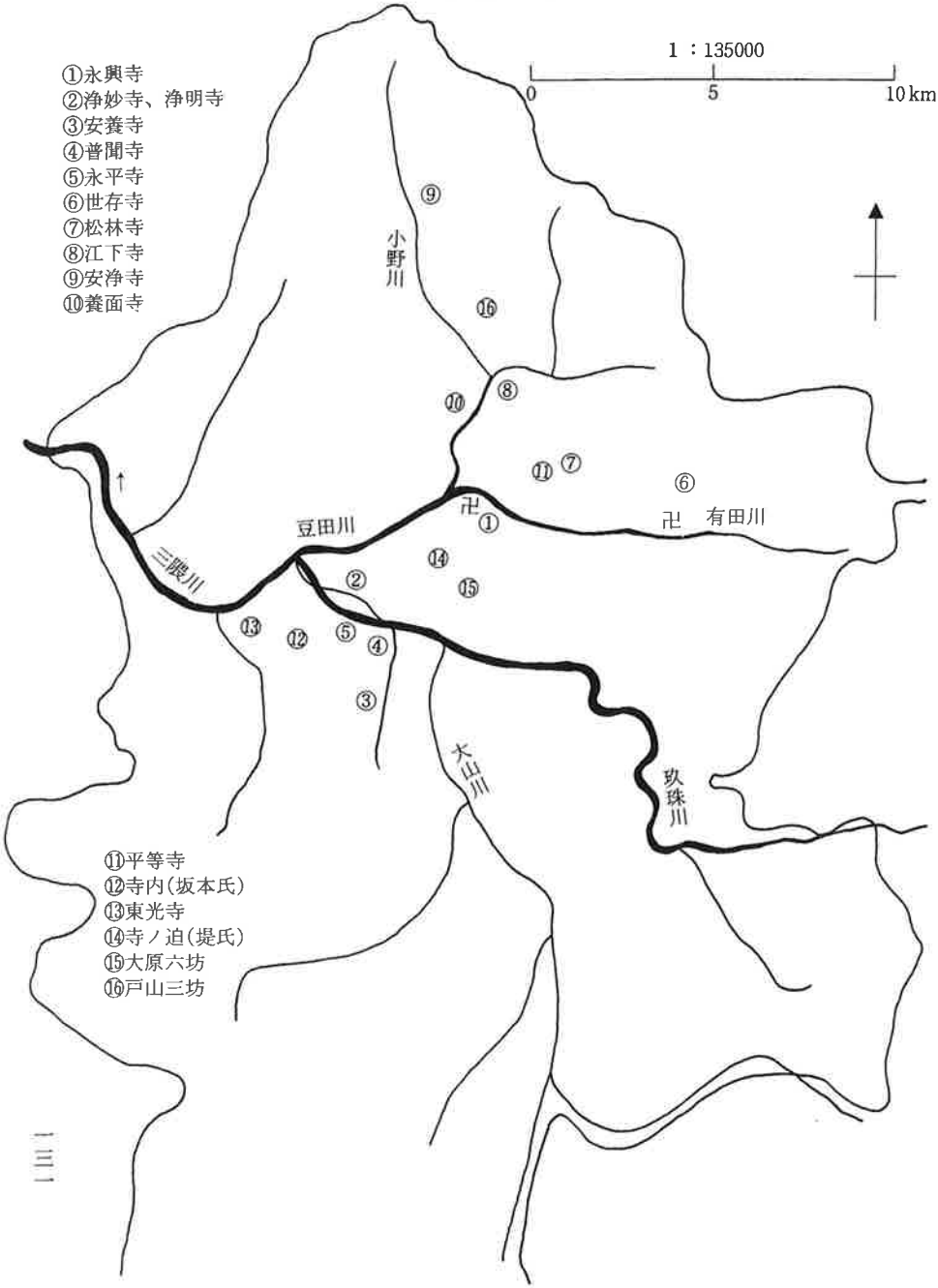
永興寺本尊木造十一面観音立像　鎌倉期

木造兜跋毘沙門天立像　平安後期

毘沙門天立像　二躰　平安後期

持国天、廣目天、多聞天、増長天

日田地域中世寺坊


1：135000
0
5
10km
①永興寺
②浄妙寺、浄明寺
③安養寺
④普聞寺
⑤永平寺
⑥世存寺
⑦松林寺
⑧江下寺
⑨安浄寺
⑩養面寺
⑪平等寺
⑫寺内(坂本氏)
⑬東光寺
⑭寺ノ迫(堤氏)
⑮大原六坊
⑯戸山三坊
小野川
豆田川
三隈川
有田川
大山川
玖珠川

寺は廃寺になったが、貴重な仏像は残され往時を偲ばせる。

田畠　五町二反　宗永寺　所在不明

田畠　十町六反　明巖寺　所在不明

田畠　六町八反　浄土寺　財津　在

田畠　二町一反四畝　神照寺

（神正寺）とも書く。高瀬本町小園に地名残る。通称地名である。

田畠　七反七畝　浄妙寺

十二町村新原にあり。何時頃廃寺か不明。地名として残る。字浄明寺（じょうめんじ）一―七二番（地番）日田延享一揆では延享三年十二月二十九日に馬原村庄屋　穴井六郎右衛角・伴　要助・組頭　草三郎惣次は処刑され、浄明寺河原の露と消えた。

田畠　三町一反六畝　豊府稱名寺

称名寺は、「豊府」とあるように豊後府内称名寺小路に所在した時宗の寺院である。

田畠　三町五反　正受院

田畠　一町九反一畝　延命院

田畠　四町六反六畝　三會庵

これらは、小野にある戸山神社の住坊である。戸山神社は標高七〇六・六米の頂上近くに社殿があり、日田の盆地が一望に収まる。その社殿の南側三―四〇米位下方に五十坪前後の空地が三―四ヶ所あり、その一つには湧水の泉もあり、院の跡ではないかと思われる。また延命院は延命寺であったと戸山神社旧記にある。

田畠　六反八畝　眞如坊

田畠　八反五畝　實相坊

田畠　六反三畝　一乗坊
田畠　五反三畝　實咸坊
田畠　六反四畝　空善坊
田畠　三反三畝　理趣坊

以上は、大原神社の六坊である。これらの坊は大原神社の東南方の地に散在して居たようで、詳細は不明である。

［参考］

田畠　九町　大原大宮司
田畠　四町七反一畝　戸山
田畠　四反八畝廿歩　石井宮司
田畠　六反六畝　大原承仕
田畠　九反八畝廿歩　大原總禰宜
田畠　九反二畝　二禰宜
田畠　四反八畝　三禰宜
田畠　九反五畝　夜開郷司
田畠　九反一畝　日理郷司

三　『亀山鈔』、『豊西説話』所載の寺院

『亀山鈔』、『豊西説話』は森春樹の著書である。

森春樹は明治八(一七七一)年隈町の旧家鍋屋六世左ェ門(俳人画家としても著名)の長子として生まれた。享和三年(三十三

才で)家業を継いで、七世伊佐ェ門を襲名したが、文化四年家名を弟永昇に譲って別居し、天保五(一八三四)年八月三十日、隠宅悠然亭に六十四年の生涯を閉じた。[高倉芳男記より]

『亀山鈔』(文政十三年一八三〇)

高瀬五寺

普門寺

高瀬、琴平町にあり。応保二(一一六二)年日田郡司職大蔵永宗が祖先の鬼蔵(おにくら)大夫永季の菩提を弔うため建立。開山笑巌大和尚の木像「応永十六(一四〇九)年巳忍卯月十三日開眼、佛師防州式部順成住持比丘　花押」の銘。境内には五輪塔五ー七〇〇年前のもの二基が並ぶ。

永平寺　(俗にいひじと云う。えいへいじの訛)

寺跡には二基の板碑がある。一基は高さ一米弱、巾四十糎。阿弥陀如来の種子キリークの梵字と応長元年(一三一一)の銘、もう一基は二米に一・一米、キリークと正和二年(一三一三)銘がある。

安養寺

荒平にある。旧寺の跡は、現在は四ー五十坪程度の畑地か。小高い丘になり墓石、塔の石など残り、昔日を偲ばせる。地名を「アニウ」「あにうじ」と云うが通称地名である。

寺には、阿弥陀如来坐像(桧造り)がある。像高四六・七糎、木片の蓮弁を一枚ずつ差した蓮華座に坐す。

膝の内部には次のような墨書がある。

安養寺

□

導

平九郎袈□

六郎左衛門宝□□

平乙□道□□

永□□□□妙

道栄道不乙女

道勝完要□□

□□妙忌五郎

平□妙性了康

□随音

應永十年癸未二日廿八日

彼岸

神照寺　前に出た。

長清寺（朝清寺）陣ケ原公園の東南方に地名として残る。通称地名である。以上高瀬五寺。

長福寺　渡里村吹上山

新原に長福寺屋敷

千體地蔵　堀田村　古き寺なり

阿弥陀堂　入江村

圓福院→菅相寺　羽野村

大字三和（二六五七―六八番）小字寺田あり。関係ありや。

鬼ヶ城　高瀬村　普門寺の近く、西南方、高瀬川国道二一〇号線橋梁の東側の下附近。闍屈山浄信庵。正徳二（一七一二）年壬辰三月岩下大助の先祖浄信庵地を選び　穀且仏躰を安置す、とある。宝篋印塔一基、石造の小仏像十数体が並ぶ。比高数十米、登る道は険峻。仏庵跡からの盆地の眺めは絶佳。昔日庵あり。木造の仏像を安置したが、現在隈町勝連寺にある。

明星寺　鶴河内村　日田鬼太夫永季の廟所、虚空蔵毘沙門天二尊小庵に安置す

四　村落領主の氏寺

㊀　世尊寺（世存寺）

諸留村の村落領主師富（モロトミ）孫右衛門尉の氏寺である。天正十七年段階〔『豊西記』〕の師富孫右衛門尉の所領は次のようである。

田地　三十三町三反一畝二十八歩

畠地屋敷　十六町四反五畝二十六歩

〔註〕田畠の面積は天正十七年の太閤検地の記録で、前に出た。二、豊西記の寺社の田畠面積も同じ。

この世存寺に三体の仏像があった。そのうち二体には銘がある。

①木造薬師如来坐像　桧製像高三四・五糎

背面に

〔仏堂内仏像墨書之銘〕

薬師如来　日光　月光　神将像奉建立世存寺本尊

願主住持子良乗

大旦那兵部大輔　源　親胤（チカタネ）

佛師和泉守　広香　天文十六（一五四七年）白　十月　日

〔同仏像光背板裏面墨書銘〕

天長地久四海安全別而郡中繁栄檀越息災延命子孫快楽寺中佛法不退故也（豊後国日田郡諸留村世存寺）

住持　良乗（花押）

当村役人　中島藤右衛門（花押）

天文十六年丁未十月　日

②木造地蔵菩薩立像　桧製　像高二八・八糎

〔木造光背裏墨書銘〕

豊後国日田郡有田郷師富村世存寺之門内浄池院之本尊也（奉造立地蔵一躰古文）

右意趣者、為浄池香蓮童子尊ヲ、是造立、依比功力、太除有為塵勞忽可趣佛界者也、

二親源親弱（イク）大神氏女敬白、仍如件源満塩丸七歳之時死去畢、

佛師薩州住人一国六十六部聖　普賢坊

干時弘治三天（一五五七年）　五月六日

〔台座銘〕

為香蓮童子豊州日田郡師留村世存寺門内浄池院本尊

この仏像以外に朽ち果て、どうにか仏像の形骸を残し、天文の頃から更に百年以上を過ぎたと考えられるものが一躰保存されている。

仏像墨書銘の「源親胤」と師富家系図の「師富参河守親胤」の親胤が一致する。また「豊西記」の師富孫右衛門尉、大友吉統高麗陣に際して供奉衆の着到記録の「豊後国侍着到」にも師富孫右衛門尉の名前があり、師富孫右衛門が実在で、諸留村を

領し、居住して居たことは確実である。なお、その子孫は筑後黒木町横浜市に健在である。

師富孫右衛門は大友の系列に入る人物であった。関ケ原の戦で大友吉統は大阪方につき、吉統は別府石垣原で数百の兵を集め、徳川方の黒田如水(孝高)の千余の軍と戦い敗れた。師富孫右衛門はこの戦いに参加し敗戦で、師富村の居館など全てを捨て、筑後黒木に家族と共に去った。

村人が世存寺の仏像を、他の石造地蔵と共に祭り今日に到った。世存寺は廃寺となったのである。なお、氏寺には住職が居た。

㈡ 松林寺

師富村を西に有田川を下ると、谷は広く開き、有田川を中に左岸から中尾川、右岸から石松川が平行して西流し、やがて合流する。広々とした平地は灌漑もよくゆきわたり水田は稲を実らせる。ここが日田八人(八奉行)の一人石松氏の居所石松村である。

石松肥前守廉正　日田八奉行の一員

『豊西記』ではこの石松一族の所領地を次のように記す。

田畠	六十二町	石松忠十郎
田畠	十七町四反	石松玄蕃允
田畠	十町六反	石松掃門助
田畠	四町一反	石松主税助
田畠	三町七反	石松加右衛門尉
田畠	三町四反	石松治助
田畠	二町	石松左近允

田畠　一町　石松調右衛門尉

この平地の北側に、東西に山稜が走る。やはり東西に平行して谷川が流れる。蕪川である。狭い谷間の平地に石松氏の居館があり、左岸の小高い山頂上、谷から数十米の所が「城の辻」と村人は云う。字名「古城」地番一四五〇―一四五三番の土地。谷間の居館の近くに氏寺「松林寺」があった。

大友吉統の高麗陣に参加は僅か一名。石松喜左衛門尉のみである。しかし天正九年十月の大友宗麟の彦山攻略の時は、玉屋口から攻め入った。石松兵部少鎮昌で、その奮戦の状況報告の文書が残っている。

この石松一族は中世末期この一帯が久留島藩領になった折り、全員この村を去った。松林寺はこの際に廃寺となる。主流は大肥、中島村に移り近世は庄屋を努めた。他は十二町村、日高刃連村に石松姓が小集団をなしている。

㊂　安浄寺又は安静寺

この寺は小野村の佐藤一族の氏寺である。佐藤氏は日田八人(八奉行)の一人である。

八奉行（目代）　佐藤出雲守永信

『豊西記』には佐藤一族の所領を次のように記す。

田畠　三十九町六反　佐藤山城守

田畠　十町九反　佐藤四郎右衛門尉

田畠　六町一反　佐藤縫殿介

田畠　一町九反　佐藤六郎

城は字名「城山」(四七六九―四七七四番)その麓に屋敷跡、近くに氏寺「アンジョウジ」佐藤氏はその地に昭和の年代まで住んで居たが、近世は庄屋を努めて居た。廃寺になったのは何時頃か不明。現在佐藤本家筋は東京に健在。

㊃ 江下寺（エゲジ）

この寺は財津寺の財津一族の氏寺である。財津は日田八人（八奉行）の一人である。

八奉行　　財津長門守鑑永

『豊西記』には財津一族の所領を次のように記す。

田地　八十四町四反十五歩

畠地　六十一町七反三畝十四歩

財津大学允（永高）

田畠　三十一町三反一畝九歩　財津又太郎

田畠　六町二反六畝　財津三七郎

田畠　七町六反　財津六郎

田畠　七町八反九畝廿歩財津傅右衛門

田畠　十二町　財津孫三郎

その居館は字名「安全」（二九六―三〇六番）の広場にあり、近世は庄屋で、庭の樹齢数百年のキンモクセイは往時をしのばせる。居館の南隣りに氏寺「江下寺」があった。現在畑地。小字は江下（二五〇番）附近。廃寺になったのは何時頃か不明である。

城は小字「城」六二三―六四三番で花月川辺の小高い山である。

㊄　養面寺

この寺は、羽野村の羽野一族の氏寺である。

八奉行　羽野遠江守鑑房

『豊西記』では羽野一族の所領を次のように記す。

田畠　四十六町三反　　羽野新助

田畠　　八町六反三畝　羽野理右衛門尉

田畠　　四町三反四畝　羽野弾助

田畠　　三町一反七畝　羽野左京亮

田畠　　一町八反四畝　羽野祭主允

居館は、大字三和字上屋敷(二四八―二八〇番)下屋敷(二一六―二三五番)城は西側後の山、字城ノ辻(三四五―三五七番)字城脇(三三二―三四四番)氏寺は居館近くにあったともいうが、少し離れた字「養面寺」(五八九―六三一番)の中ともいう。他の例からも字「養面寺」と氏寺とみるのが妥当と思われる。

㊅　平等寺

この寺は坂本一族の氏寺と推測される。

坂本村の坂本氏は日田大蔵氏滅亡後は、日田八人(八奉行)の頭として、日田地域の最大最強の一族であった。

八奉行の筆頭　坂本伯耆守鑑次

『豊西記』には坂本一族の所領が次のように記される。

田地　　百三十九町五反八畝九歩

畠地屋敷　百十一町九反八畝七歩
坂本備中入道
田地　二十五町五反五畝四歩
畠地屋敷　十八町一反十三歩
坂本式部丞
田地　廿四町二反六畝十五歩
畠地屋敷　三十六町七反五畝十八歩
坂本勘八
田地　九町二反六畝四歩
畠地屋敷　三町八反五畝五歩
坂本主税助
田地　十二町六反九畝十歩
畠地屋敷　六町八反八畝四歩
坂本平左衛門尉
田地　七町七反七畝廿九歩
畠地屋敷　五町九反三畝九歩
坂本藤内允

以上の六名は、大友吉統高麗陣参加者、他に坂本氏十二名が記されるが、ここでは略す。

坂本村の坂本氏の居館の跡は現在小字名「屋敷」（五七二―六一〇番）。南向きの村の背後は比高数十米の東に連なる起伏の多い山並み。山の北と西を山裾を包むように花月川が南に流れ、有田川に合流する。「屋敷」の南、有田川と花月川の間は広い水田地帯。背後の西端、居館の裏道から石段を登ると、毘沙門堂がある。村人はこの附近を「嘉門殿」（通称地名）と呼び字名は縊（くびり）、七〇九―七三五番の中にある。

この附近の最高処が字「古城」（八四七―八八五番）人々とは「原城」と呼んでいる。

坂本氏の氏寺は何処か。人々は山の南麓といっているが、それらしい土地はない。「刑場跡」（通称地名）はある。麓の東方数百米の所に「平等寺」（一一六八―一一九三番）の地名があり、ここに柳観音堂がある。この地名の残る「平等寺」が、坂本一族の氏寺と考えられる。

㊐ 石井村の「寺内」

ここは、坂本因幡守の氏寺か。『豊西記』は因幡守の所領を次のように記す。

田地　十六町一反八畝廿五歩
畠地屋敷　廿六町四反七畝十二歩
坂本因幡守

郷土史家故大蔵和市氏は「知行地は石井村。墓は石井村中にあり今寺ノ跡といふ」と記している。

『豊西記』にて田畠　十六町　坂本彦右衛門尉」とある。坂本彦衛門尉は、因幡守の二男、大字石井の西、字津辻に墓があり、高麗陣にも参加した。その直系子孫の坂本キヨさん（八十一才）が墓を守っている。その一族十二戸が近くに住んでいる。

因幡守の居館は中屋敷（一九九―二一四番）にあり、その北側の山が城、字「古城」（八十七―一〇七番地）氏寺が字「寺内（テラウチ）」（一〇八―一二八番）で、寺の名前が不明である。代官小川行広のとき、慶安三年石井村（庄屋古後家）は村分けがあり、串後川

より東を石井村から分離した。寺の名前が不明で「寺内村」とした。その名前が判れば〇〇寺村となったのであるが。代官は梅野村より梅野氏を呼びその庄屋とした。坂本因幡守一家は関ケ原戦の直後筑後に去った。何の理由か不明である。二男の彦右衛門尉は津辻に残ったのでその子孫は現存する。梅野氏は因幡守の居館跡を貰い受けたので広い屋敷地となった。最近その因幡守の子孫という、坂本氏が大牟田より来訪、坂本氏は立花藩に任せたようである。氏寺跡の中世の特徴の残る石垣と、青磁が出土し、近くに板碑一基がある。

㈧ 永平寺

永平寺は大蔵氏関係の寺のようであるが、その関連の高瀬氏(高瀬村)が祀っていたらしい。

日田八奉行の中に高瀬山城守鑑俊がいる。

『豊西記』は高瀬一族の所領を次のように記す。

田畠　四十町九畝　高瀬下野守
田畠　六町七反十六歩　高瀬治郎丞
田畠　七町四反二十一歩　高瀬新右衛門
田地　六町三反七畝
畠地屋敷　三町六反七畝三歩　高瀬勘之丞

以上四名高麗陣に参加した。『豊西記』にある他六名は略す。

㊇ 「寺の迫」

堤氏の氏寺か。この迫の近くの山上に「地蔵寺」があったとの説あり。

八奉行に堤越前守鑑智が居る。

『豊西記』では堤氏の所領を次のように記す。

田畠	二十五町		堤三右衛門尉
田畠	十七町五畝		堤式部丞
田畠	三町		堤源内允
田畠	三町一反		堤石見入道

この内、式部丞、石見入道の両名は、大友吉統の高麗陣に参加した。城は上城内東の山にある。氏寺は居館の北「寺ノ迫」（一二一五―一四一一番）附近にあったようである。寺の明確な名は不明。

五　地名に残る「寺」名

小字名に寺の名の残っている処が十ケ所余りある。確実に寺のあった証拠を残しているのもあり、〇〇寺という寺名のみで、他は何もないが地形から寺跡ではないかと考えられる所もある。

大字	字	地番	証拠の有無
北豆田	梅岸寺	五五〇―五八三	
日高	東寺	二八〇―三〇七	有
日高	法恩寺	六〇七―六六五	有
十二町	浄明寺	一―七二	有

高瀬	長泉寺	一八七七―一九七二	
花月	現堂寺	八四一―八八六	
西有田	平等寺	一一六八―一一九三	有
有田	佐寺	一五六―二三五	有
有田	至徳寺	七八二―八〇二	
有田	世尊寺	二五一〇―二五一七	
東有田	世尊寺	九一―一―九六	確有
大肥	古寺	二五五六―二五六三	
大肥	万千寺	二九九八―三〇一二	
鶴河内	東見寺	四七二七―四七八六	
石井	寺内	一〇八―一二八	確有
内河野	東光寺	一三一―一四六	確有

東光寺を証する文化八年に建てた石塔あり

六　何故に廃寺になったか

中世末は地方に群雄各居し、その覇を争う混乱の時代であった。しかし、信長、秀吉の登場によって中央の統制が進み、検地、刀狩と地方農民の武装解除と農地の検索、武士の城下集住、農地農民の中世的経営から、単婚小家族の農民自作農主体の耕作、石高制、村方三役の強力な統治の近世的村落と移行するのである。

ここに中世の領主制村落は解体し、荘園は消滅し社寺所持の田畠も没収され、村落領主もその田畠を農民に開放し、自己の

耕作している直営田のみで、村方三役に落ち着くか、主を求めて城下の武士に変身する以外に生きる道はないのである。

日田の地域も、大蔵氏や八奉行の力はなく、太閤蔵入地や徳川幕府の直轄地となり、領主制村落は消滅し、単婚小家族の自作農主体の村に、村方三役が表面に立ち、新時代が始まるのである。

この時代の変遷の中で、『豊西記』に出て居た永興寺以下全ての寺院はその所持田畠を失い他の寺も支持した主が力を無くし、村落領主も居領も城も氏寺も捨て、他の地に去り、また自己耕作の僅かの農地では、氏寺の経営は不可能となるのである。

近世の寺院は徳川幕府の宗教政策から、全ての住民は何らかの寺院の門徒にならねばならなかった。しかし、中世の村落の寺は、一般の農民とは直接的には関係はなかった。

そのため、日田地域の中世の寺院は、中世の時代の流れの中にその姿を消すのである。

ところで、大友宗麟天正六年七月臼杵でカブラル神父につき受洗し、キリスト教徒になった。そのため日田の寺院は宗麟の焼打ちにあい無くなったと信じている人が多いが、それは間違いである。

宗麟は十一月務志賀(ムシカ)(宮崎県延岡市無鹿)で、キリスト教的理想国家の建設を夢見、寺社を焼却、しかし島津との敗戦で挫折した。日田では寺社を焼いた事実は皆無だからである。

七　おわりに

日田地域の中世に存在した寺院について、その場所、現状、残された文化財、史料、領主との関係、由緒、廃絶の理由などについて若干の所見を披露してみた。

日田郡司職大蔵氏の氏寺、永興寺はすばらしかったと思う。その残されている仏像は見事なものばかりである。

これも寺の主、大蔵氏が滅び、寺領が没収され、経済的基盤を失うと、寺院は消滅する。その他の村落領主の氏寺も、ささやかな仏像が残され、その墨書で往時の歴史が偲ばれるのは貴重である。領主の心使いの気配りが、温く感じられるのである。

これらの寺が、何時建立され、また廃寺が何年頃か不明なものが多い。

中世史料は極めて少ない。この地で残された中世の寺の跡、そこに立つと鎌倉、室町の頃、この地に生きた人々の聲が聞こえる。

――風の音か、読経の聲か――

本考は廃寺の状況、史料を整理することによって日田地域の歴史研究の一助となればと思い執筆した次第である。

（平成九年九月十一日）